

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.11

わらわ（意：私）は、べんだい（意：正月飾り）から引きちぎっておいた小判を手にし、

「い～し～や～きいもお～・・・」とスピーカーを鳴らし近づく軽トラックに手を挙げ、

「くりゅしゅうない（苦しゅうない）、芋屋、近う。」と申したのぢゃ。

「苦しゅうないなんて時代掛かったガキがまた・・・。何だねお嬢おちゃん。

お芋かい？」に

「そにゃたは芋屋ぢゃろ。ブリでも売っておりゅのか？」とわらわがたちゅね

る（尋ねる）と芋屋は、

「こりゃあ生意気なガキときたもんだ・・・。ありゃ、お嬢ちゃんは市民様ん

とこの援様かい？えらい生意気に・・・いえ、大きゅうなられて・・・。」と

いうもによだから、

「せち（世辞）はよい。芋を所望ぢゃ。」と言いつけたによら。

「へいへい、アッシは焼き芋屋ですよ。いかほど差し上げましょう？」と言う

芋屋に

「こりえて買えるぶんぢゃ。」とわらわが小判を渡すと、ちよの（その）小判

をふちぎ（不思議）そうに見ていた芋屋が、



「・・・援様。冗談でしょ?。」とばきや（馬鹿）にちたようにゆう（言う）

きやら

「どうちた?・・・小判をみちゃことがにやいのか?けいちゃん（計算）でき

にやいなら、ちゅり（お釣り）は要らにゆ。芋を3本ぢゃのむ。（頼む）」と

いいちゅけたのぢゃ。

それに芋屋は、

「・・・。マ・マ・ゴ・ト・・・かい？しかし変わったお嬢ちゃんだ。付き合い切れんが市民の奥方様には良くして貰っているからなあ。ここはママゴトのお付き合いをして・・・五郎島（金時）のくず芋でも差し上げておくかの。ほれ、援様、3本じゃ。」と

^{つぶや} 呟きながら、やっと3本きゅれた（呉れた）のりゃ。

「かたちけない（忝い）。芋屋、せいちえい（精々）励めよ。」とほめちえ（誉めて）やっちゃんのに芋屋は、

「参ったねえ・・・。援様、まるで時代劇の姫様みたいですね。じゃあアツシはこれで。」と言いきり、およそ芋を売るとは思えぬスピードで軽四をはちらちえ（走らせ）ちゃって（去って）いったのりゃ。ちよの（その）車の^{かげ}陰から、ちえんが現れたのりゃ。



物語は、支援のお話しへと続き _____

「あああっ？芋屋が……。おい待てえっ芋屋っ」ようやくたどり着いたやに思われたその時、喜んだ拙者をよそに、件の焼き芋屋は猛スピードで走りさったのじゃ。

「あああ……。金時さまがあああ……」と拙者はその場にへたりこんだのじゃ。

「ちえん（支援）。」「旦那様。」と聞き覚えのある姫様とご助の声が……。

「……。？空腹とは恐ろしいものじゃな……。とうとう幻聴まで聞えるわい。」

と顔を上げれば姫様と、その姫様の背に隠れるように、ご助が心配そうに拙者を見ておった。

「姫様……。にご助。た、台風が来るというのに……。て、低血糖で、動けませぬ。無念でござる。」と申し上げた次第。

すると姫様が

「大事ない。ちえん芋ぢゃ。甘いぢよ。」と姫様が金沢市指定ゴミ袋を掲げたのでござる。

「や、や、焼き芋でござるかっ！」と駆け寄る拙者に、

「ありえ・・・にやま（生）ぢゃ。」と袋から芋を取り出した姫様の無常の
声が・・・。とうとう拙者は気を失ったのじゃ。



「・・・うん？」どれほど気を失っていたものじゃろうか。パチパチと何かが
弾ける音と、体を温かく包む柔らかく、煙い風で拙者は意識を取り戻したのじ
ゃ。

「まだですかい姫様？」とご助の声に

「もうちよろちよろぢゃな。ほれ、どうぢゃ？」と姫様の声。

声のする方を見て拙者は魂消たまげもうした。姫様とご助が下馬の広見、それも地蔵様の前で焚火をしておったのちゃ。



「な、なにをしておいでじゃ！ご助、おのれがついておって姫様に斯かよう様な危ない真似を！！姫様も姫さまじゃ、台風が来るといふ情けない！！！」と兩名を叱りつけたのじゃ。

「だ、旦那様・・・」と何か話そうとすゝご助を制し、

「台風で強風が吹くかも知れぬという時に街中で焚火をするなど言語道断。火のついた枯れ葉が舞い上がり、近所に散らばったら何とします！大体、姫様は

子供じゃ。子供の火遊びはいけませぬ！！花火、いえ、大筒のときに拙者にお誓いなされた筈じゃ！！約束が守れないそんな姫様、拙者は嫌いじゃっ!!!!」と、続けたのじゃ。

拙者の^{こんしん}渾身の説教に、泣き出した姫様が広見の角に立てられたテントへと駆けだすと、テントの中から

「あら援、どうしたの？泣いたりして煙たかったの？」と奥方様の声が・・・



「…………ご助。…………これはどうしたのぢゃ？」とご助に訊けば、

「旦那様。台風は進路を西に、大陸の方へと進路を変えておりますれば……。」

「へ？……し、しかしじゃな……。焚火はいかんじゃろ……。焚火は？」と

申せば

「旦那様。これは湯涌温泉のぼんぼり祭りのイベント案内の為、ここらの町会の皆様が繰り出して……。ほれ、あちらでも出店の前で火を焚いておりましよう？」

「……ゆ、湯涌ぼんぼり祭り……？」

「神無月（10月）の終わりころに湯涌温泉で行っておりますお祭り……。フェスティバルですじゃ。」

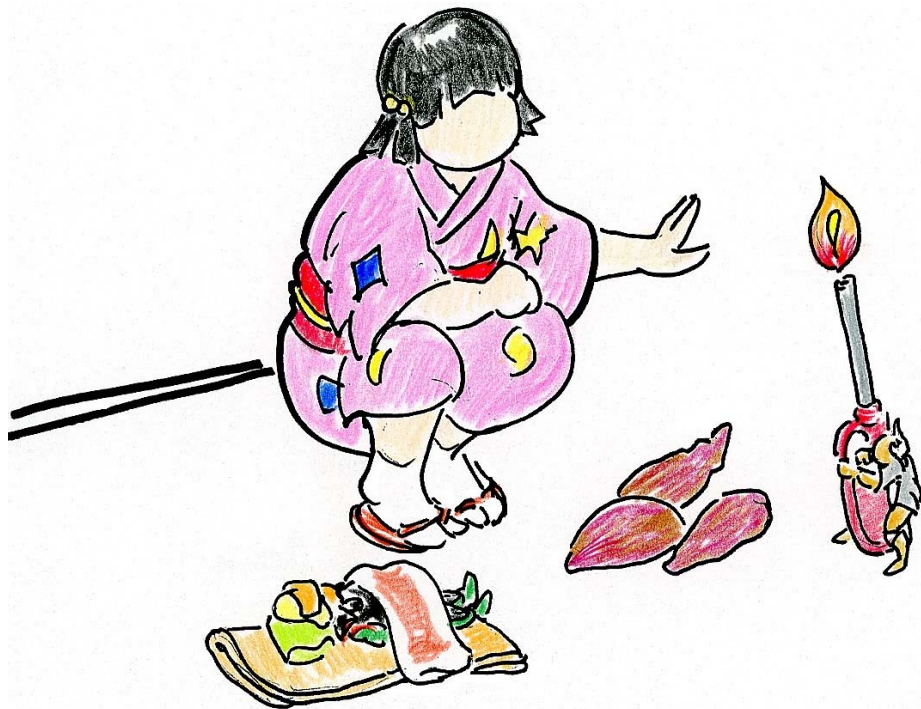
「な、なにがフェスティバルじゃ。フェスティバルじゃとしても、姫様が焚火で火遊びをされたことに違いはあるまい。おのれが注意差し上げずに何とする！」とご助を叱れば、

「芋をお焼きになっていたんでさあ」

「……芋……？」

「旦那様が低血糖で倒れられてから姫様のご心配は一通りではございませんでした。」 「・・・あっ！」

「旦那様が倒れてから2日の間、旦那様の為に芋を焼きたいと言って、そりゃ大変だったんですぜ。私が枯れ葉で焚火をしましょうよお、と申し上げても姫様は『ちえんと約束ちたから二人だけでは駄目』 と仰って、今日までお待ちになって・・・。あと、もう少しで焼けるって時に・・・旦那様。あの言い方は酷ひどすぎますぜ。」



ご助のいう通りじゃ。拙者が無様に倒れて動けぬうちに・・・。姫様の御心も知らず・・・支援の馬鹿めが！と、その場から逃げ出したのでござる。

その後ふらふらと市中をさまよい、疲れ果てた拙者が番小屋へと戻ったのは亥の初刻（午後9時）頃でござった。

そして、拙者との約束を守り、拙者の体を心配なされた姫を悪しざまに叱るなど、支援の役にあらず……。拙者は殿様にお役御免を申しでることを心に決め、行李（意：衣装箱）を開けたのぢゃ。

そうしたらのお、蓋を開けた行李の中からえも知れぬ良い匂いがしたのぢゃ。

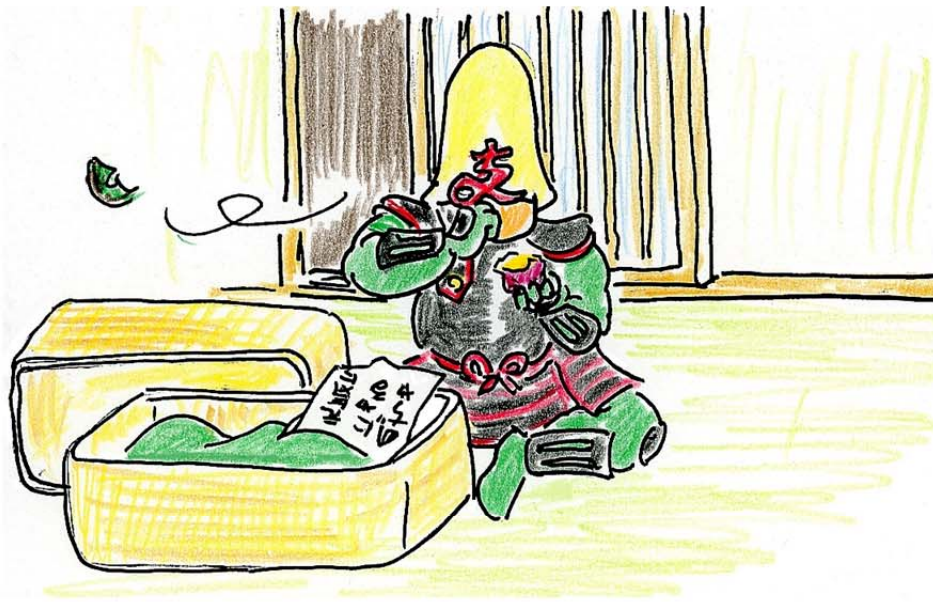
芋ぢゃった。姫様の手紙が添えられた小さな焼き芋が一つ、行李の中に……。

そして手紙には姫様の拙い（意：下手な）字で

『ちえん じえったいに どこにも いったは にやらにゆ。こによ いもは じえんぶ ちえんが たべて げんきに にやるのぢゃ。 えん』と書かれておった。

市民家に参って半世紀以上……。拙者が涙したのはこの時が初めてござった。

甘い筍の芋がしょっぱく感じられはしたが、拙者の心は至福に包まれておった。



拙者は姫様の手紙を何度も何度も、何度も読み返しておった・・・。

「この・・・芋は・・・全部・・・支援が・・・食べて・・・全部？はて？」その時で
ござった。

「ふうふうう・・・んっ」 とご助めが屁を・・・。



……。 その屁を嗅いで拙者は全てを理解したのじゃ。

「ご助っ！拙者の芋を……。何個食ったのじゃ!!!」

「ひいーっ、お許しを……。」と番小屋中を逃げ回るご助。

その姿を天空の満月がガムテープ越しの窓から何時までも照らしておったの
じゃ。

今回の教訓は……

強風が吹くかも知れぬという時に街中で焚火をするなど言語道断。火のついた枯れ葉が舞い上がり、近所に散らばったら何とします！大体、姫様は子供じゃ。子供の火遊びはいけませぬ！！……。でした。

(つづく)